

篠原助市のノール理解

—教育学体系の複合的構成の中で—

助 川 晃 洋

I 研究の課題

世代的にも実績の上でも入沢宗寿や長田新と並び、特に戦前の我が国教育学アカデミズム、いわゆる講壇教育学を代表する人物の一人である篠原助市の（主要な）著作では、欧米、中でもドイツの哲学者や教育思想家のテクストが縦横に駆使され、多様な学説や概念、言葉が浩瀚に参照・引用されている。その事実を踏まえて、篠原教育学については、様々な哲学的議論との結びつきが取り沙汰され、先行研究も数多くある。そこでは篠原と新カント学派、とりわけマールブルク学派のナトルプ（Paul Natorp）との影響関係を指摘するものが目立ち、およそ篠原解釈の定説とさえなっている⁽¹⁾。しかし篠原とディルタイ（Wilhelm Dilthey）の弟子たちとのかかわりは、ある出来事以降（後述）、確かに傾斜を深めていくにもかかわらず、従来ほとんど俎上に載せられることなく、不分明なままに放置されている。篠原はディルタイ学派（精神科学的教育学派）をどう見ていたのか、彼らの物した文献をどれくらい涉猟し、どのように解釈していたのか。本研究の課題は、ノール（Herman Nohl）の場合に着目して、これらの問いに対する回答（ただしフォーカスを絞る以上、必然的に部分的なものにならざるを得ない）を提示することである。

II 転向の経緯

京都帝国大学で西田幾多郎、朝永三十郎、小西重直らに学んだ篠原は、42歳となっていた1919年5月、母校の東京高等師範学校に教育学の教授として迎えられている。「彼は東京高師に移ってから、京都の大学院時代にはじまったしごと、すなわち新教育、

あるいは生活教育の、プラグマチズム的基礎づけを排して、その批判哲学的基礎づけをおこなうという課題を追いつづけた⁽²⁾。その成果が、処女作『批判的教育学の問題』（1922年）にまとめられている。同書の「序」において篠原は、次のように述べている⁽³⁾。

私はまだ教育学についてまとまった考えを持っていない。今のところでは一貫の態度でもって、教育各般の問題に接近しようとしておこなっているにすぎぬ。批判哲学から授かった眼でもって、まともに教育をみつめようと企てているにとどまる。この書に収めた論文は、書いた時からいっても、私の思想の傾向からいっても、その一つ一つにかなりの隔りがある。もとより首尾一貫したものではない。が、唯一つ、私の態度においては何の変りもないことを、ひそかに信じている。私は批判的教育学の畑に、小さな鋤を入れるために生まれてきた。もし態度までも改めることがあったら、それは私の精神的死滅を意味する。

当時の篠原は、ナトルプに倣って、教育という現象の純粋な姿を「自然の理性化」と定式化していた。しかし篠原は、『批判的教育学の問題』の原稿を版元の博文館に預けた後、1922年2月から一時帰国を挟んで、1923年9月までの約1年半、海外に出張するチャンスを得てドイツに入国し、ナトルプに推挙されて、ハレで「ディルタイの門弟」⁽⁴⁾のフリッシュアイゼン・ケーラー（Max Frischeisen-Köhler）と面会したことを契機として（1923年6月23日）、教育を「個人の歴史化」の作用として命題的にとらえるようになる。自伝『教育生活五十年』（1956年）において篠原は、次のように述べている⁽⁵⁾。

ライブツィッヒの滞在は、私の教育に対する見解をかなりゆり動かした。フリッシュアイゼン＝ケーラーによるディルタイとシュライエルマッヘルの関心は批判的教育学から眼を歴史的方面に、カント的なものから生の哲学を転ぜしめた。（中略）さような歴史と体験による徹底的開眼はフリッシュアイゼン＝ケーラーを俟たねばならなかった。この意味にお

いて、僅か二時間ばかりの同教授との会見は、私にとり数年の読書に勝るとも言い得られるであろう。

留学中に篠原は、ナトルプら新カント学派からシュブランガー (Eduard Spranger) らディルタイ学派へと思想的潮流が変化しつつあるドイツ教育学の発展をその肌で感じた。篠原とノールの歩みが交差する条件は、専ら篠原の方がノールの側に近づくことで、いよいよ整っていく。

Ⅲ 人物紹介の試み

篠原は、ノールについて真正面から論じた著書や論文を全く発表していない。しかし辞書的かつ伝記的な文章を一編だけ執筆している。『増訂教育辞典』（1935年）、通称「篠原教育辞典」⁽⁶⁾において篠原は、次のように述べている⁽⁷⁾。

ノール、ヘルマン Herman Nohl (1879—)

独逸現代の教育学者にしてディルタイ及びパウルゼンの学徒。一八七九年十月七日ベルリンに生まる。ベルリン大学に哲学・独逸国語学・歴史等を学ぶ。一九〇八年イエーナ大学講師、一九一九年員外教授となり、一九二〇年ゲッチンゲンに哲学及び教育学の教授として招かれ、同年新設されたる教育学の講座を担任す。

彼に依れば教育学の任務は教育現実界の分析にして、その中核は自律的な教育的態度及びその普遍妥当の方向及び組織の考察にあり。而して彼はかゝる考察の結果は凡ての世界観に同様に妥当すべしと説く。著書多けれど、特に教育学関係のものとしては「教育的及び政治的論文集」Pädagogische und politische Aufsätze (1919)「独逸陶冶論」Zur deutschen Bildung (1926)「青年の福祉」Jugendwohlfahrt (1927)等にして、特に一九二八年以来パラートと共に「教育叢書」Handbuch der Pädagogikを刊行せり。又一九二五年以来雑誌「教育」Die Erziehungの、一九三〇年以来「教育小原抛」Kleine pädagogische Texteの編集に与かる。

この篠原の叙述は、我が国教育学界におけるノールへの言及としては、時期的に最も早いものの部類に属するであろうが、長

年にわたって敬慕し、学問的自己形成を図る際に依拠した人物、例えばナトルプ⁽⁸⁾やシュライエルマッヘル（Friedrich Daniel Ernst Schleiermacher）⁽⁹⁾に関する前掲書中でのそれに比べて、質と量の両面で、正直かなり見劣りがする。しかし今日国内で流通している、いくつかの類書でのノールに関するドイツ教育学研究者の説明と妥当な範囲に限って照合してみると、実はそれほどレベルが違っておらず、また大事な情報が欠落しているわけではないことがわかる。例えば『新教育学大事典』第5巻において林忠幸⁽¹⁰⁾は、次のように述べている⁽¹¹⁾。

ノール, H. Nohl, Herman (1879~1960)

ディルタイDilthey,W.の弟子で、リットLitt,T.、シュプランガー Spranger,E.と並ぶ精神科学的教育学の代表者である。美学者、哲学者でもある。ベルリン大学では、パウルゼン Paulsen,F.とディルタイに師事し、ドイツ文学・歴史・哲学を研究した。ディルタイの下で学位を取得後、イェナ大学に移り、そこで教授資格を取得し私講師になった。1920年にはゲッティンゲン大学に招聘され、後に新設された教育学講座の正教授に任命された。国家社会主義の圧力により辞職した1937年から45年までの8年間を除けば、1949年の退職までこの大学で教育学の研究と後進の指導に当たった。彼の下から多くの弟子たちが育ち、彼らを通してドイツの教育（学）界、とりわけ社会教育や教師養成に多大の影響を及ぼした。

ノールの教育思想とその業績の背景には、ディルタイの生の哲学思想の影響と第一次大戦の従軍体験がある。ディルタイの世界観の類型論を絵画・文学・音楽へ転用し、倫理学や美学の領域で勢（おそらくは精の誤りと思われる一引用者注）力的な研究を開始したノールは、第一次大戦に召集を受け、後方基地勤務を命じられた。ノールは戦争という特異な状況の下では、人はいとも容易に精神的道徳的に墮落するのを知り、大きな衝撃を受ける。この従軍体験が、ノールをして教育の研究と実践へ向かわしめたのである。民衆の中にひ

そんでいる健全な資質を覚醒し形成すること、これが彼の教育学的出発点をなす。そのために、ノールは帰還後同僚や弟子たちとともに「民衆大学」を設け、その指導に当たった。

学術的な研究領域においては、ノールはとりわけ著書『性格と運命』（1927）において、教育人間学的研究の新路を開拓し、『ドイツにおける教育運動とその理論』 Die pädagogische Bewegung in Deutschland und ihre Theorie（1935）において、20世紀初頭の多様な教育改革の諸運動を法則性をもった内面的に統一ある運動として総括し、またそれを踏まえて独自の教育理論を展開した。彼は愛と権威に基づく被教育者への教育者の献身（教育的関係）を中核とする「教育的現実」の構造分析を科学的教育学の課題と考えた。

篠原は、大正期から昭和初期にかけて、ノール教育学の展開過程を（ほぼ）同時代的にフォローし、その理論的な性格や特徴を的確に、現代の研究水準に照らしても十分に通用するレベルで把握することに成功していたと考えられる。

IV 理論受容の可能性

篠原がノールの何を読んでいたのかについては、彼自身の回顧的な証言が残されている。『教育生活五十年』において篠原は、次のように述べている⁽¹²⁾。

終戦後、「民主主義と教育の精神」「新教育学概論」「家庭教育の話」に次いで「訓練原論」は私自身最も力を注いだものであり、「これさえ出来れば」と渾身の努力を払った。始めて手をつけたのは昭和二十三年二月二十二日、同五月から前に挙げた参考書の外、レームケ「一般心理学教科書」J.Rhemke; Lehrbuch der allgemeine Psychologie.の意志の一章を精読（同月十一日より十三日に至る）、同二十二日からノールとパラストのHandbuch der Pädagogik.五巻の中Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと順次に必要な部分を、同六月八日アイスラーの辞書の「意志」の条を調べた。いずれも抜き読みに過ぎないが、大体の構想は既に出来上っているので、その線に沿って

の抜き読みであり、言はば構想の地盤を固めるための工作に他ならなかったのである。

また『教育生活五十年』において篠原は、次のように述べている⁽¹³⁾。

昭和二十四年十二月二十七日、大阪創元社から、「独逸教育思想史」を「欧洲教育思想史」に改めたいとの申込があった。独逸教育思想史にしてが、独逸を中心とする西欧思想史とも言われるべき構想の下に書き上げたのであるから、これもさまで骨の折れる仕事ではなく、補遺の程度ですむと考えて応諾。十二月二十九日より着手、前著で説き足りなかった、英、伊、端西、白耳義等の思想を補い、かつ、中世以前の教育を極めて簡単に取り扱おうと考えた。しかし創元社の要求では上巻下巻共に頁数は以前の通りにしたいとのことなので、これには原稿で一々字数を前著と照合するのにかなり骨折った。

十二月二十九日はドクロリ（白耳義）とフェリエール（端西）を旧版に付加し、二十五年一月二日より英のローリーを再読、一月七日には独のドン・ボスコの条を訂正、一月十二日以後、中世以前の教育簡叙のためノール＝パラストの「ハンドブック」I（既出）を精読といったような順序で同三月九日、とに角全部辻褃を合わせ、十三日校訂の上創元社に送り、上巻は六月十日、下巻は六月十五日印刷発行せられた。

篠原は、1948年には『訓練原論』（1950年）を執筆するため、1950年には『独逸教育思想史』（1947年）に手を加え、新たに『欧洲教育思想史』（1950年）を世に出すためというように、その都度目的は異なるものの、いずれのケースにおいても、ノールがベルリン中央教育研究所のパラート（Ludwig Pallat）とともに編んだ大著『教育学ハンドブック』（Handbuch der Pädagogik）全5巻のうち、第1巻「教育制度の理論と発展」（Die Theorie und die Entwicklung des Bildungswesens, 1933）を参考している。同巻には、「陶冶の理論」（Die Theorie der Bildung）と「ドイツにおける教育運動」（Die pädagogische Bewegung in Deutschland）というノールの論文が収められており、これら

を順番を入れ替えて転載し、前後に「まえがき」(Vorwort)と「あとがき：教育学の二つの形式」(Nachwort:Die zwei Formen der Pädagogik)を配置して、第2版という形ではじめて単行本として刊行されたのが、主著『ドイツにおける教育運動とその理論』(Die pädagogische Bewegung in Deutschland und ihre Theorie,1935)である。

そして岩波全書『教育学』(1939年)の第4章「教育者」第3節「自制と快活」の冒頭から三つ目の段落において、その最後に篠原は、ノールの言葉を引用している。次の通りである⁽¹⁴⁾。

この生活への断念に於て、教育者の自制は極所に達するのであるが、次に彼は又教育に於て、自己固有の人生観をも自制しなければならぬ。公けの教育機関に於て公人として教育する場合、彼は自己の人生観に奉仕するのではなくて、いつでも生徒に奉仕し、生徒を通して国家に奉仕するのである。よし仏教徒であらうと、基督教徒であらうと、將た唯物論者であらうと、唯心論者であらうと、一般国民の教育に於ては、一切是等の人生観を抑へ、即ち是等の人生観を生徒に強要するの態度に出でないで、偏へに客観的精神の為に教育するといふ公明な精神を保持しつづけねばならぬ。この点に関し、私は我国の学校教育に於て一宗一派に偏する宗教教育を禁止してゐることに極めて深い意義を認める。尚彼が政治的論争に超越すべきは言ふ迄もなく、私には如何なる政党に同情を有しようとも、この同情を公けの教育に発露せしめてはならぬ。我々は「児童の前に立つときには、よし如何なる宗派に属しようとも、教育者であらうとの意志、宗派人ではなくて、却つて人を彼等から作り出さうとの意志をはつきりと持たねばならぬ。然らば他日恐らくは、我々の理念を強く、完全に代表する人が彼等の中から現れるであらう。—其の外の態度では決して(かやうな人は)現れない。」(ノール)。

増補版や改訂版が数多くあるために計算の仕方次第で異なるものの、篠原は生涯を通じて20冊を越える単著を出版しているが、それらの中でノールの言葉が引用されたことは、あくまで管見の

限り、『教育学』で上記の機会ともう一回の二度、たったこれだけである⁽¹⁵⁾。またどちらも篠原は、例によって出典を明示していない。長くノールの著作を読み続けてきた筆者にも、篠原が持ち出したノールの（ものとされる）言葉の所在は特定し得ない。前出箇所については、「教育的関係」（pädagogischer Bezug）に関する論述と内容的に重複することから⁽¹⁶⁾、「陶冶の理論」の一部を抽出的に要約したと思えなくもないが、これはあまりに好意的な偏見かもしれない、全くの創作である可能性すら否定できない。引用文に先立つ地の文のトーンやロジックも、まるでノールの（思考を内面化した言い回し）ではなく、むしろ戦時下の切迫した時代状況（ここは時局、あるいは時務と表記する方が正確か）を色濃く反映した「日本教育学」⁽¹⁷⁾ そのものである⁽¹⁸⁾。

V 研究のまとめと今後の展望

『教育の本質と教育学』（1930年）のもとになった篠原の学位論文に対しては、審査教官（教育学の小西、倫理学で社会学兼担の藤井健治郎、心理学の野上俊夫）から、「個人と社会の関係を説く場合、批判的な方法（例えばナトルプ）と歴史的方法（例えばシュライエルマッヘルや、その系譜に当るディルタイ一派）とが混淆し、首尾一貫していない」という問題点が指摘されている。このことについて篠原自身も、「あちらから縦糸、こちらから横糸と、しかも全然系統を異にせる糸を交ぜ合わせたので、結果は裁縫を始めたばかりの女兒の雑巾縫いのようなものになり、変えまいと力めていた土台骨すら動揺し、この動揺を鎮めようと、台風に動かされる小屋につっかい棒を打ちつけるかのような、力仕事に一生懸命であった」と述懐している⁽¹⁹⁾。そして篠原教育学が、ドイツ諸学を複合し、完成した（非体系的な）体系であり（「寄木細工であるかの如き恣態」⁽²⁰⁾）、「ディルタイ一派」の教育学説の影響を深く受けていることは間違いないが、そこにノールは含まれない。結局のところ、篠原にとってノールは、「導きの糸」（Leitfaden）とでも呼べるような、大きな意義を認めるほどの存在ではなかった。篠原がノール教育学の精髓に触れていたにせよ、

それを高く評価し、積極的に受け入れて、独自の理論構築を推し進めたとはいえられない。

ところでIで述べたように、篠原を新カント学派の教育学者として位置づけ、論じることが日本教育思想史の教科書的知識に属するほど自明の事柄であるのに比べて、篠原＝ディルタイ学派という図式は、必ずしも共有されているわけではない。またディルタイ学派と言っても、その議論は一括りにできるものではない。引き続き個別の検討を進めたい。

注

- (1) 大浦猛「篠原助市における教育学形成の特質－欧米教育思想攝取の態度を中心に－」『教育哲学研究』第31号、教育哲学会、1975年5月、pp.1-7。
木内陽一「実験教育学から新カント派哲学へ－明治末年・大正期における篠原助市の外国教育学との取り組みについて－」『鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）』第9巻、鳴門教育大学、1994年3月、pp.27-43。
宮本勇一・佐藤宗大・深見獎平「篠原助市における『開いた体系』としての教育学－自立的科学への逆説的理路－」『教育学研究』第88巻第2号、日本教育学会、2021年6月、pp.223-234。
- (2) 梅根悟「解説 篠原助市とその教育学」篠原助市著、梅根悟編『批判的教育学の問題』明治図書出版、1970年、p.240。
- (3) 篠原助市著、梅根悟編『批判的教育学の問題』明治図書出版、1970年、p.13。
- (4) 篠原助市「フリッシュアイゼン・ケーレルの教育説（特に教育学の類型に就て）」『教育断想 民族と教育其他』宝文館、1938年、p.431。

しかしフリッシュアイゼン・ケーラーの学的営為は、ディルタイとの師弟関係の枠内で完結していたわけではない。「彼は新カント派、特にマールブルヒ派の思想をも尊重し、又一時西南派のヴィンデンバルドの講義にも熱中し

た。歴史派に属しながら歴史主義を超越し、体験を重んじながら論理的明晰を期さうとする彼の態度は、単に其の哲学説に於てのみならず、教育説に於ても随処に光つてゐる」（pp.431-432.）。

- (5) 篠原助市『教育生活五十年』相模書房出版部、1956年、p.307.
 「むしろこの『開眼』は西田哲学を学んだ哲学的思索の出発点においてすでに用意されていた」という指摘もある。矢野智司『京都学派と自覚の教育学 篠原助市・長田新・木村素衛から戦後教育学まで』勁草書房、2021年、p.302.
- (6) 篠原助市『教育資料事典第1巻 篠原教育辞典・上』日本図書センター、2002年
 篠原助市『教育資料事典第2巻 篠原教育辞典・下』日本図書センター、2002年
- (7) 篠原助市『増訂教育辞典』宝文館、1935年、p.736.
 引用に際し、旧漢字をすべて新字体に改めた。以下同じ。
- (8) 同上、pp.713-715.
- (9) 同上、pp.450-453.
- (10) 林忠幸『現代ドイツ教育学の思惟構造』東信堂、2006年
 O.F.ボルノウ著、林忠幸訳「ヘルマン・ノールと教育学」『福岡教育大学紀要 第4分冊 教職科編』第30号、福岡教育大学、1981年2月、pp.89-98.
- (11) 編者代表細谷俊夫・奥田真丈・河野重男・今野喜清『新教育学大事典』第5巻、第一法規、1990年、pp.470-471.
- (12) (5)と同じ、p.432.
- (13) 同上、p.434.
- (14) 篠原助市『教育学』岩波書店、1939年、pp.145-146.
- (15) 同上、p.292.

第6章「教育の形態と作用」第4節「学校教育の精神」
 2「真と真実」において篠原は、「ノールが『真実といふ意味に於ける真への意志の教育はあらゆる学校—あらゆる

意味に於ける学校一の最も内部的な神経である。』と言つた」と述べている。

- (16) 助川晃洋「ノールにおける『教育的関係』と陶冶共同体の問題—『ドイツにおける教育運動とその理論』に見るノールの『教育的関係』把握の内実—」『宮崎大学教育文化学部紀要（教育科学）』第4号、宮崎大学教育文化学部、2001年3月、pp.29-42.
- (17) 石川謙編『最新日本教育学十二講』文教書院、1939年
 稲富米次郎『現代の日本教育学』育芳社、1942年
 入沢宗寿『日本教育学』東洋図書、1939年
 乙竹岩造『日本教育学の枢軸』目黒書店、1939年
 吉田熊次『日本教育学の性格』東洋大学、1940年
- (18) 子安宣邦『日本近代思想批判 一国知の成立』岩波書店、2003年、p.153.
- (19) (5)と同じ、pp.328-329.

『理論的教育学』（1929年）において篠原は、「私はシュラエルマッヘルよりも、ナトルプの批判的教育学（中略）に左袒する」と述べている。また『教育の本質と教育学』の「序」において篠原は、「私は本書に於て先験的な立場を守る」と述べている。「篠原は本書においてはなお批判哲学的立場を守り、ただ彼がドイツ留学以来関心をもつに至ったディルタイ派の思想を、何とかしてこの立場のもとに調和させ、手なづけ、一定の位置を与え、とり込もうとして苦心したのである」。新カント学派からディルタイ学派への転回は、実際には、篠原が回想しているような「『突如の転回』としてではなく、ゆっくりとした足どりで、徐々に生じたのであって、『理論的教育学』の場合と同じように、本書においてもいまだ、そのような転回は起こってはいない」。

篠原助市『理論的教育学』教育研究会、1929年、p.63.

篠原助市「序」『教育の本質と教育学』教育研究会、1930年、p.1.

(2)と同じ、pp.261-262.

(20) 乙竹岩造「教育科学発達の展望(三)」『教育学研究』第4巻第6号、東京文理科大学教育学会、1935年9月、p.627.

参考文献

- 天野正治編『現代に生きる教育思想5 ドイツⅡ』ぎょうせい、1982年
- 池田進・本山幸彦編『大正の教育』第一法規、1979年
- 稲垣忠彦編集・解説『教育学説の系譜』国土社、1972年
- 稲葉宏雄『近代日本の教育学 谷本富と小西重直の教育思想』世界思想社、2004年
- 井深雄二『戦後日本の教育学 史的唯物論と教育科学』勁草書房、2016年
- 岩本憲『教育本質論の探究』ぎょうせい、1984年
- 小笠原道雄・田中每実・森田尚人・矢野智司『日本教育学の系譜 吉田熊次・篠原助市・長田新・森昭』勁草書房、2014年
- 小笠原道雄・森田尚人・森田伸子・田中每実・矢野智司『続日本教育学の系譜 京都学派とマルクス主義』勁草書房、2020年
- 海後宗臣『教育学五十年』評論社、1971年
- 木村元編著『日本の学校受容 教育制度の社会史』勁草書房、2012年
- 熊谷一乗「昭和初期教育目的論における価値観の一考察—篠原、小西、牧口常三郎の場合—」『教育学研究』第40巻第1号、日本教育学会、1973年3月、pp.1-10.
- 駒込武・川村肇・奈須恵子編『戦時下学問の統制と動員 日本諸学振興委員会の研究』東京大学出版会、2011年
- 沢柳政太郎著、滑川道夫・中内敏夫共編『実際の教育学』明治図書出版、1962年
- 下程勇吉「篠原助市教授の生涯と業績」『京都大学教育学部紀要』第4号、京都大学教育学部、1958年3月、pp.66-88.

- 篠原助市『篠原助市著作集』全7巻、学術出版会、2010年
- 寺崎昌男「日本近代教育学説史研究の方法と意味」『教育学研究』第48巻第2号、日本教育学会、1981年6月、pp.105-111.
- 寺崎昌男・竹中暉雄・樽松かほる『御雇教師ハウスクネヒトの研究』東京大学出版会、1991年
- 寺崎昌男・「文検」研究会編『「文検」の研究 文部省教員検定試験と戦前教育学』学文社、1997年
- 中内敏夫『近代日本教育思想史』国土社、1973年
- ヘルマン・ノール著、平野正久・大久保智・山本雅弘著訳『ドイツの新教育運動』明治図書出版、1987年
- 藤原喜代蔵『明治・大正・昭和 교육思想学説人物史』全4巻、湘南堂書店、1980年
- 宮野安治『教育関係論の研究』溪水社、1996年
- 森昭編著『現代教育思潮』第一法規、1969年
- 森川潤『ドイツ文化の移植基盤—幕末・明治初期ドイツ・ヴィッセンシャフトの研究—』雄松堂出版、2003年
- 柳久雄「教育学研究の遺産—篠原助市の教育学について—」『教育学研究』第40巻第4号、日本教育学会、1973年12月、pp.329-335.
- 柳久雄・川合章編『現代日本の教育思想 戦前編・戦後編』黎明書房、1962・1963年
- 山口和宏『土田杏村の近代 文化主義の見果てぬ夢』ぺりかん社、2004年
- 山下徳治著、海老原治善編『明日の学校』明治図書、1973年
- 山田清人『教育科学運動史—1931年から1944年まで—』国土社、1968年
- 米澤正雄「篠原助市における教育学理論の形成・展開とデューイ思想受容との関係の解明—永野芳夫の場合との対比を念頭において」『アジア文化研究所研究年報』第44号、東洋大学アジア文化研究所、2010年2月、pp.28-43.

付記

篠原の『教育生活五十年』には、次のような一節がある (p.209.)。

大正七年、海水浴から帰ると間もなく京都の武道専門学校（校長大久保弘道氏）の校長事務取扱から、一週二時間講師に來任してくれと頼まれた。結局引き受け、朝八時から出講することにした。職員室では職員一同（校長代理も）同窓で、時間は厳重に守られ講義の原稿は幾らか体育を重んじ、参考書として生徒にウェルプトンの「体育」を持たせた。

学校では武道科（剣道部、柔道部）の外、国語漢文科及び生理衛生科の教員資格を得しめ、その上に研究科（二年以内）があった。学生の英語の能力が不十分なので、せめて「ウェルプトンの体育論」E.Welpton; Physical education. 位は読破し得るよようにとの老婆心から、校長代理に相談して、午前七時から一時間アーヴィングのスケッチ・ブックを読ませた。暗い中に宅を出て教室に入ると、学生は数も少なく、しかも早朝の寒稽古をすませて、急いで来るので準備している学生は半分にも足りなかった。登校の途次、校長代理と概ね同行し、英語の特別講義の終わったころ、他の相国寺西門前町から通勤の職員も続々見えた。それから二時間原稿を筆記させ、狭い職員室で大きな陶器の火鉢を囲んで雑談の後十一時頃自宅に帰りつくのである。

武専は、旧制中等学校の柔道や剣道の指導者を育成すべく、1905年に大日本武徳会が設立した武術教員養成所を起源とする教育機関であり（1947年廃校）、本部道場の武徳殿では、全国各地から選抜された若者たちが、過酷な、ときに死者すら出るほどの激しい稽古を重ねていた。本学前身の国士館専門学校が（日本体育専門学校、東京高師と並んで）武専と同じポリシーを持っていたことに思いを致すとき、私には篠原がとても近しく感じられ、不思議なシンパシーを禁じ得ない。

井上靖『北の海（上・下）』新潮社、2003年

栗山圭介『国士館物語』講談社、2018年

佐藤宏拓穂「国士館専門学校における武道教員養成の研究」

- 『武道学研究』第39巻第2号、日本武道学会、2006年12月、pp.27-37.
- 全国茗友会編『教育剣道を培った人々ー東京高等師範学校・東京体育専門学校篇ー』いなほ書房、2003年
- 藤堂良明『学校武道の歴史を辿る』日本武道館／ベースボール・マガジン社、2018年
- 中嶋哲也『近代日本の武道論 <武道のスポーツ化>問題の誕生』国書刊行会、2017年
- 武道専門学校剣道同窓会編『大日本武徳会武道専門学校史』1984年
- 増田俊也『木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか』新潮社、2011年
- 山崎真之「『教員免許台帳』にみる国士館専門学校ー中等諸学校武道教員免許状取得者数の検討を通してー」『国士館史研究年報 楓原』2009創刊号、学校法人国士館、2010年3月、pp.49-78.
- 山本礼子『米国対日占領政策と武道教育ー大日本武徳会の興亡ー』日本図書センター、2004年